

東京医療保健大学大学院 医療保健学研究科 医療保健学専攻
学位論文 要旨

人工股関節全置換術を受けた患者の股関節の状態と
自己管理行動実施との関連

東京医療保健大学大学院
医療保健学研究科 医療保健学専攻
博士課程
領 域 名 看護学
学籍番号 HD119006
氏 名 堀之内 若名

背景 (Background or Introduction)

人工股関節全置換術（以下 THA）はわが国では年間 8 万件近くが行われている。THA 後の患者の多くは人工股関節と折り合いのついた生活を送っているが、不要な合併症や再置換術を避けるために様々な自己管理行動を実施・継続することが必要である。しかしながら、THA 後の自己管理行動の実施状況、またその実施に股関節の状態がどのように関連するののかについては未だ明らかでない。THA 後の患者の自己管理行動の実施状況、ならびに股関節の状態と自己管理行動との関連が分かれば、患者の状態を理解した上での患者支援に活用することができる。

目的 (Objective)

THA を受けた患者の自己管理行動の実施状況ならびに股関節の状態と自己管理行動との関連を明らかにすること。

方法(Methods)

調査協力に同意が得られた THA 専門医がいる関東近郊の 5 施設で、THA 後に外来通院中の患者を対象に質問紙調査を行った。調査内容は属性、自己管理行動 8 項目（転倒転落予防行動・脱臼予防行動・体重管理行動・感染予防行動・荷重軽減行動・骨強化行動・筋力強化行動・拘縮予防行動）、股関節の状態に特化した日本整形外科学会股関節疾患評価質問表 (JHEQ) であった。JHEQ は得点が高いほど良い状態であることを示す。記述統計ののち、属性別の自己管理行動の実施状況、自己管理行動の実施の有無を目的変数とした階層的ロジスティック回帰分析を行った。

結果(Results)

調査票の配布数 411, 回収数 288 (回収率 70.1%), 有効回答数 214 (有効回答率 66.7%) であった。分析対象者は男性 41 名 (15%), 女性 233 名 (85%), 手術時平均年齢 62.9 ± 11.69 歳であった。自己管理行動の実施率は「感染予防行動」が 93.8% と高かったが、他は 40~70% であった。ロジスティック回帰分析の結果、属性とは独立して JHEQ の「動作合計」は自己管理行動の転倒予防行動, 脱臼予防行動, 体重管理行動, 感染予防行動, 荷重軽減行動と有意な負の関連 (それぞれ $OR=0.94, 95\%CI=0.89-0.99$; $OR=0.90, 95\%CI=0.85-0.95$; $OR=0.95, 95\%CI=0.90-0.99$; $OR=0.84, 95\%CI=0.73-0.96$; $OR=0.92, 95\%CI=0.86-0.97$) が、「股関節

の状態」は荷重軽減行動と有意な負の関連($OR=0.98$, $95\%CI=0.96-1.00$)があった。一方、「メンタル合計」は感染予防行動と有意な正の関連 ($OR=1.15$, $95\%CI=1.01-1.31$) があった。その他の JHEQ 下位尺度と自己管理行動 8 項目との関連はみられなかった。属性のなかでは、調査時年齢が高い、BMI が低い、THA 以外の通院あり、職業なし、介護保険あり、転倒歴ありの方が、JHEQ とは独立して自己管理行動を実施している結果であった。

結論 (Conclusions)

設定した自己管理行動 8 項目のうち、感染予防行動以外の実施率が高いとはいえない状況であった。自己管理行動は、JHEQ 下位尺度の「股関節の状態」は悪いほど、「動作合計」の状態が良いほど自己管理行動をしていないことが、一方「メンタル合計」は状態が良いほど実施していることが示された。患者教育は、対象者の属性とともに股関節の状態に応じた支援が外来継続受診のなかでも実施され、自己管理行動の必要性や効果を認識してもらうことが必要である。